

## 東山遊楽図屏風

六曲一雙

紙本著色

縦一五二・七糎 横三五一・四糎

江戸時代（一七世紀前半）

京都 個人蔵

新出の「東山遊楽図屏風」を紹介する。

向って右端から景観内容を示してゆくと、豊国廟・三十三間堂・方広寺梵鐘、大仏殿方広寺、清水寺・八坂の塔、祇園松原・祇園社木の鳥居・二軒茶屋・祇園社、そして左端最上部に描かれているのは知恩院であろうか。

景観年代は、方広寺の鐘楼が建立された元和元年（一六一五）から、祇園社の鳥居が木造のものから石造のそれに替った正保三年（一六四六）のあいだ、すなわち江戸時代初期の約三十年間に絞りこむことができる。

この屏風の最大の特徴は、他の風俗図と同じように雲形を用いているのだが、金箔をいっさい使わずに、画面の地下でもって雲形を表現しているところにある。そのために、多くの風俗図屏風が金箔を多用して、画面の華かさと裏腹に喪ってしまった品格のようなのものが、この屏風には備わっている。かかる技法による風俗図としては、重要文化財に指定されている京都D家本「園城寺・日吉山王図屏風」（六曲一雙・もと襖）が著名である。D家本は慶長年間の狩野正

系の絵師によるものとみられる（狩野永徳の二男・孝信の筆との説が有力）が、この屏風の整然とした建築の配置、および人物の描写にも狩野派系の匂いが濃厚に漂っている。ただし、高津古文化会館蔵「東山遊楽図屏風」六曲一雙と比較する限り（ほぼ同時期の制作と考えられる）、狩野派正系と断ずるには躊躇されるものがある。いまは、狩野派の圈内に含まれる絵師の可能性が高い、としておくのが妥当だろう。

しかし、大仏殿楼門の下の煙草屋、祇園社境内のささら説教の場面、あるいは祇園の松原での喧嘩沙汰に脅えて泣きじゃくる子供など、画人の表現意欲の濃密さは、当代風俗図の水準を越えるものであり、今後、注目されてよい作品といえる。

（狩野博幸）